

# プロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験はアイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成にどのように影響するのか

林 佳祐（ヴィッセル神戸） 渡辺 英雄（武藏野大学教育学部教育学科 准教授）

## 要約

サッカーは世界中で最も多くの国・地域で行われているスポーツの一つであり、多くの国・地域がプロリーグを有している。各リーグには多くの外国籍選手が異国の中でもプレーしているが、これまでプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がどのように選手に影響を与えるかの研究は多くない。

本研究はプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験が、アイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成の観点からどのように選手達に影響を及ぼすかを明らかにすることを目的に行われた。この目的のために、プロサッカー選手として海外移籍を経験した3名に半構造化インタビューを用いて調査を行った。

研究結果として、プロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がアイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成に大きく影響することがわかった。異文化体験はサッカー選手のキャリア形成において重要な要素である「自己不安」、「代替キャリアの模索」に対して良い影響を与えることがわかった。また、異文化体験により、職業的アイデンティティは変化しやすいが、国家的アイデンティティは変化しにくいことが明らかになった。海外移籍による異文化体験が、プロサッカー選手に肯定的な影響を与えた理由として、サッカーという集団スポーツでのチーム内活動時間が長いことにより、異文化に触れる時間が通常よりも濃く、幅広い異文化に触れる事が出来たことが大きな要因だと考えられる。

## 1. 本研究の背景

サッカーは世界中の一番多くの国・地域で行われているスポーツの一つである。また多くの国・地域がプロリーグを有している。そのような状況の中で、多

くのプロサッカー選手が海外移籍を行う。CIES Football Observatory (2023) が 135 リーグに行った調査では、全 62,610 選手中 14,405 選手が外国籍であった。そして外国籍の選手の人数は増加傾向である。ただこれまでプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がどのように当人たちに影響を与えるかについての研究は多くはない。

一般的に他国での異文化体験は、体験者の異文化コミュニケーション能力やキャリアへの考え方を変えることがわかっている。たとえ短期間での異文化体験であっても、異文化コミュニケーション能力は向上するという研究報告は多い (e.g., Ra et al., 2022; Shiri, 2015; Tajeddin et al., 2020)。また異文化体験はキャリアに影響を与えることもわかっている (e.g., Kronholz & Osborn, 2016; Valls-Figuera et al., 2023)。

アスリートに関する研究において異文化体験はこれまで十分に研究が進んでいない。日本国内の研究では、阿部他 (2021) が行った日本におけるアスリートのキャリアに関する研究動向をまとめた調査がある。多くの研究はアスリートの「競技引退」、「支援制度」、「雇用・就職」、「キャリア発達」の 4 つの分野を中心に行われてきたことがわかった。阿部他 (2021) は 1996 年から 2020 年までの研究の動向をたどり、アスリートのキャリアはアスリートを取り巻く環境が影響していると分析した。1996 年から 2002 年までは J リーグが発足して、プロサッカー選手のセカンドキャリアについての研究が盛んであった。また 2011 年から 2020 年まではアスリートの職務、能力の汎用性を模索するようなキャリア形成についての研究が顕著であった。前述の通り、プロサッカー選手は自国を離れて競技を行う数が増えている。海外移籍に伴う異文化体験がどのように選手たちに影響を及ぼすかは注目に値すると考える。

## 2. 先行研究

### アイデンティティ

アイデンティティとは国籍、人種、性別による区別だけでなく、人々がそれぞれをどのように認識することも含まれる (Lawler, 2014)。またアイデンティティとは自分を他人に対してどのように示すのか、また同時にどのように自分が他人に認識されるかも含む (Paltridge, 2022)。大沼 (2003) は、ナショナル・

アイデンティティとスポーツの関係をアイルランドに焦点を当てて、議論している。スポーツには国籍、民族、宗教の影響が大きく見られるという。アイルランド島の大部分を占めるのがアイルランド共和国であり、北部分が英國領である。そこではキリスト教のカトリックとプロテstantの対立が続いている。サッカーチームもそれぞれのコミュニティを基盤としている。サッカーチームが宗教の特定のグループに関連付けられる状態が続いている、対立構造が如実に表れる。

スポーツ選手とアイデンティティの関係は、競技にどれ程継続的に関わる心理的状況かというスポーツ・コミットメントという観点からも研究されてきた。スポーツ選手の競技者アイデンティティは、このスポーツ・コミットメントの形成に大きな役割を果たすと考えられている（萩原・磯貝、2014）。競技者アイデンティティは他者との関わりや環境に関する「社会的要因」と個人の感情や志向性に起因する「心理的要因」の2つの要因によって形成される（溝上、2008）。

### 異文化コミュニケーション能力

異文化コミュニケーション能力は複数の要素から成り立っていると考えられている。Byram (2020)によれば、異文化コミュニケーション能力は知識（自文化、他文化に関する知識）、態度（自文化、他文化を偏見なく理解する姿勢）、手法（自文化、他文化に関する事柄について深層的に理解する術を持つこと）の3つから構成されている。

この異文化コミュニケーション能力は異文化体験により向上する。それが短期間の異文化体験でも異文化コミュニケーション能力は高まると先行研究は示している。Shiri (2015) は8週間アラブ圏に滞在した大学生352人に調査を行った。研究対象者は、現地の歴史、政治を有したり、日常的ではないコミュニケーション場面で適切に振る舞ったり、中級程度の異文化コミュニケーション能力を得たと評価された。Ra et al. (2022) の調査では、タイから英語圏へ短期留学した際に、学生の異文化への態度がどのように変化するかを調べた。異文化体験により、英語の多様性への寛容度が高まったことがわかった。

## キャリア形成

サッカー選手においてキャリア形成はキャリアのどの段階でも重要である。それはサッカー選手の平均引退年齢が約26歳と若いうちに引退をしなくてはいけない状況があるからである。また引退後8割以上のJリーガーはサッカー界から離れずにいる（上代・野川、2013）。このような状況をキャリアトランジションの観点から研究することができる。Drahota & Eitzen (1998) は Role Exit Model という枠組みを考案し、スポーツ選手のキャリアトランジションを理解しようとした。Role Exit Model では4つの段階があるとされている。第一段階は「自己不安」である。次の段階が「代替キャリアの模索」であり、第三段階が「転換期」である。転換期では、引退に焦点をあて、能動的な引退であるか、それとも受動的な引退であるかの2つに分けられる。最後に「新たな役割の創造」がある。ここでは未練やあきらめ、社会からの反応、家族などの重要な他者への影響が重要な要素となる。

上代・野川（2013）はJリーガーにインタビュー調査を行い、「転換期」にどのような行動パターンがあるのかを明らかにした。研究の中で、「転換期」のキャリアトランジションは、解雇通告を受けて、次のキャリアを紹介してもらう「受動型」、解雇通告を受けて、自ら次のキャリアに移行する「半受動型」、自ら引退を決め、自ら次のキャリアに進む「能動型」の3つのパターンに分類された。そして、解雇通告を受けて、自ら次のキャリアに移行する「半受動型」が一番多いパターンであった。

## 3. 研究課題

本研究では下記の研究課題を明らかにする。

- (1) 海外移籍に伴う異文化体験はサッカー選手のアイデンティティにどのように影響するのか。
- (2) 海外移籍に伴う異文化体験はサッカー選手の異文化コミュニケーション能力にどのように影響するのか。
- (3) 海外移籍に伴う異文化体験はサッカー選手のキャリア形成にどのように影響するのか。

#### 4. 研究方法

本研究は、インタビュー調査法を用いて行われた。インタビューデータの信頼性を維持するために、インタビューは文字起こしが行われた。分析の妥当性を高めるために、この研究ではインタビュー中に追加の質問を組み込み、インタビュー対象者から提供されたコメントについての説明を求めた。

インタビューデータを分析するために、この研究では Ritchie and Spencer (1994) によって開発された分析枠組みを使用した。分析は3つの分析段階に従った。枠組みのコーディングとその開発、データの枠組みへの当てはめ、そして解釈を行った。まず、文字化されたインタビューデータは内容のまとまりごとにパッセージに分割された。その後分割されたパッセージごとにコーディングが行われ、ラベルが割り当てられた。次に、ラベルに基づいてフレームワークが開発された。次に、各パッセージに枠組み内のカテゴリが割り当てられた。最終的にデータは、著者によって解釈された。

#### 5. 研究対象

研究対象は日本国籍のプロサッカー選手2名（大輔、悟）、オーストラリア国籍のプロサッカー選手1名（マイク）である。研究対象者3名はプロサッカー選手としてのキャリアを過ごしている間にそれぞれ複数年の海外移籍経験がある。大輔はアメリカで3年間、悟はオーストラリアで5年間、マイクはクウェートで2年間、その後ベトナムにて1年間プレーした。悟は既に引退し、大輔とマイクは現役プロサッカー選手としてのキャリアを継続しているが、どちらも海外移籍を経て現在はそれぞれの国内プロリーグで競技を続けている。

#### 6. 結果

インタビュー調査結果では、枠組み分析により分類されたカテゴリに分け、研究対象者3名（大輔、悟、マイク）ごとの分析結果を示す。

##### アイデンティティ（国家的・職業的アイデンティティ）

大輔は日本とアメリカにおける文化の違いから異文化で自身のアイデンティティを確立することに戸惑いを見せた。ただ異文化に触れ自ら考えることにより、自分なりのアイデンティティを確立していった。大輔には日頃から自分が悪

くなくても『ごめん、ごめん』と謝る癖があったと言い、現地でもトレーニングや試合中に先に謝ることが多かった。ある日、大輔は自分に非がない場面でごめんと謝ったところ、プレーに対しての議論がしたかったチームメイトからとても怒られたと話す。『日本人特有の揉めたくない、ことなきを得ようと当たり障りないようにすると逆にキレられた』と語った。さらに『日本人は相手から褒められた時にそんなことないですよ。って返答する人が多いですよね』と大輔が言うように、日本の謙遜する言動に対して、アメリカでは私生活やプレー等で褒められた際には『ありがとう、嬉しいよ』と相手の褒め言葉に対して素直に受け入れる姿勢があることに気付いた。これらの経験から大輔はそれぞれの国でのコミュニケーションの取り方、考え方、行動に大きな違いがあると感じた。しかしだ大輔は自国とは異なる環境に身を置いても、『時間を守るとか挨拶をする、さぼらないとか、日本人の勤勉さみたいな部分は海外では強みになる』と考え、日本人としてのナショナル・アイデンティティを保持した。その結果、人としての信頼感はアメリカでプレーしていても感じる事ができたと話す。

大輔はプロサッカー選手としてのアイデンティティについてアメリカでの経験に影響を受けた。プロサッカー選手として、『アメリカでプレーする選手は結果が全て。もちろんチームを勝たせたいと思っているけど、一番は自分が活躍出来ればそれでオッケーと思っている選手ばかり』とチームメイト達の個人至上主義な一面を見たと言う。大輔は日本でのチームを重んじるサッカー文化を持ちながらも、個人で結果を残すことが大切だと考えるアメリカの職業的アイデンティティにも影響を受けた。さらにアメリカではプロサッカー選手に対する周りの反応や対応にも驚いたという。『空港とかでも普通に話しかけられる。長々と会話をしてくれる一般人もいて、向こうではプロサッカー選手はただ単に職業の1つっていう感じ』と周囲の扱いに日本でプレーしていた時との差を感じた。それは、周囲だけでなくアメリカのプロサッカー選手自身の振る舞い方にも差があると大輔は話す。『自分がプロなんだっていう雰囲気は別に出さないし態度で示したりもしない。逆に日本のサッカー選手は中にはプライドが高くて偉そうな人もいますしね』と違いを語った。

悟はオーストラリアのチームメイト達とのアイデンティティの違いを発見しながらも、幼少期から続けているアイデンティティを貫くことがあった。それは、

時間に対する考え方や、ロッカールーム等の集団で使用するスペース時での行動だったと話す。日本で生まれ育った悟には日本的な考え方、習慣が染みついており、『時間を守る、ロッカールームのごみを片付けて帰る、洗濯してもらうユニフォームや靴下は裏返しにしない。だって、日本でしていたことを違う国に来たからってしなくなるのは気持ち悪いじゃないですか』と自身の行動に関しては日本ではこうするべきと考えられる行動を意識していたと話す。

次に悟はオーストラリアと日本、二国間によるファン・サポーターのプロサッカー選手への扱い方の違いに気付いたという。『オーストラリアではブーイングが少なく、負けてもよく頑張ったという感じ。日本ではJリーガーは一目置かれている。持てはやされるというか神みたいな扱い。あれはプロ意識が芽生えるだろうなって思いますね』と話すように、日本ではファンサービスにおいてサインや写真を撮って終わりということが多いことに対し、オーストラリアではファンがフランクに話かけてきて会話をする場面が多いことも日豪の差ではないかと悟は考えた。

マイクは異なる文化や宗教の国に身を置きながらも、マイクのアイデンティティが変わらない部分があった。クウェートでプレーしていた時に一番驚いたことは、『多くのイベントが男性のみで行われ、スポーツは男性のものといった雰囲気。特にスタジアムは男性の場所といった感じで試合の時、女性は僕の妻しかしなかつた』と話す。オーストラリアでは家族が試合を観戦することは自然なことで、そこに『性別の差はない』と話す。クウェートでのスタジアムにおける習慣は理解していたが、マイクはチーム側に家族席の用意をお願いした。マイクの妻はスタジアムでの観戦は許可されたものの、『妻が用意された席は普通の観客席。外国籍選手の妻でも決してVIPシートに座れるとは期待しない方がいい』と、その国でのハイアラキー、男女間の差を感じたと語る。

マイクは自国とは異なるクウェートやベトナムのアイデンティティにプレッシャーを感じることはあったが、多様性を認めて異なるサッカー文化でも現地の価値観に適応しようと努力した。『ベトナムやクウェートではサポーターから外国籍選手に対して執拗に違いを生み出すことを期待されていた』と話す。それはチームスポーツとしてチームの一員として扱われていた母国オーストラリアで戦う外国籍選手のチームメイトが受けっていた扱いが自分とは異なっていたと

語る。『ファンからはプレーの内容ではなく、ゴールを決めたか、アシストをしたか数字を問われ、結果が出なければSNSで厳しく非難されることもあった』とクウェートやベトナムでの経験を語る一方で、オーストラリアでは『選手は勝利の為、全てのプレーヤーには役割があり、それを遂行する。それがオーストラリアで習い育ってきたサッカーの考え方』と、サッカーの考え方、文化が違う事がプロサッカー選手に対する周りの振る舞いや扱い方に違いがあるのではないかとマイクは考える。マイクは海外移籍により異なるアイデンティティに触れながらも、『海外ではいつも結果に追われてプレッシャーを感じることが多かつたが、それぞれの国で違ったサッカー観がある。常にオープンマインドでその国のサッカー文化にも適応したいと思っている』と異国のアイデンティティにも理解を示し、マイク自身のアイデンティティにも影響を与えた。

### 異文化コミュニケーション能力（知識・態度・手法）

大輔は異なる文化の言動や相手との距離感に対して違いがあると知り、現地の人々との言動や相手との距離感に適応した。またそのように振る舞う背景についても考えようとした。大輔はアメリカでプレーする中で監督、チームメイトとの距離感が日本でのプレー時と比べて凄く近かったと話す。『アメリカでははっきり物事を言っても後腐れないし、断られても全然引きずらない。でも、仲良くなったら凄い深い付き合いが出来る。距離感が全然違う』と日本とのコミュニケーションの違いを見つけ、それ以降大輔は現地での言動の仕方に適応する努力をして、彼らとの距離感を縮めた。大輔ははっきり言葉として伝えようとする現地の人々の言動や距離感の近さについて『移民が多いので、裕福な人が多くなったと思うから、育ちというか環境で、みんなで助け合う事が凄く多かったのかな』と語る。

また大輔はアメリカでの人々のコミュニケーションの取り方を知り、自国の年齢や経歴を意識する文化と比較し、自身の経験と照らし合わせた。アメリカのチームメイトが大輔と接する際に年齢を気にするという事はなかったと話す一方で、大輔は『逆に日本に帰ってより周りがすげ一年齢を気にしているなって感じる時が増えました』と違いに気付いた。大輔は年齢だけではなく経歴についても日米間のチーム内での違いを経験した。大輔が語るように『アメリカも経歴は

気にするけど、日本の方が強いなって印象かな。アメリカはプレーを見て良ければすぐに経歴はひっくり返り、認めてもらえる。日本だと契約を勝ち取る時に経歴がかなり影響したし、過去どこでプレーしていたとかは気にされて認められるまでに時間がかかりますね』と違いを話した。

悟はオーストラリアでの人々の言動に影響を受けた。そしてそのような現地の人々の言動は文化的背景が影響しており、悟自身も著名人と話す時の frankな関わり方を自国のそれと比較した。『日本では年齢による上下関係はどこのチームでもあったけど、オーストラリアではどのチームでも監督やチームメイトとの上下関係はほぼないに等しかった』と話す。そして、悟自身もオーストラリアでは年齢や上下関係に関わらず、frankな言葉遣いや行動で監督やチームメイトと接することを意識した。しかし、悟は『でも、トレーニングの準備とか雑用系、ボール回しの鬼は若い選手が率先して最初入っていた。あと、面倒くさいことは若い選手って決まっていた感じ。全然対等なんだけど、どこかに境目はあったと思う』と、全ての状況で上下関係がないとは考えていないようだった。また、悟は『オーストラリアは多民族な国だからこそ、年齢や地位で人を判断したり、言動を変えたりしないのではないか』と考えていた。一方で『日本では年齢や肩書き、社会的地位とか過去の実績が凄く大事で、そういう人達を上にみてしまうところは確かに思う』と悟は感じていた。『オーストラリアのチームメイトのお父さんが超有名なニュースキャスターで本当なら絶対緊張するような人なのに、凄くfrankで話しやすかった。もし日本だったらあんな風には話せないなって思った』と、悟はオーストラリアでの経験談を語った。

悟は異文化でのコミュニケーションの取り方に影響を受け、チーム内での振る舞いにも変化させた。『日本でのキャラクターとは全く別の自分でチームメイトと関わっていたと思う。しっかり溶け込めるように日本では絶対言わないような事も言ってたし、それで笑ってくれて嬉しかったりもした』と、現地ではオーストラリア人っぽい振る舞いを見せる等、異文化間で態度を変えていたと話す。『他文化でみんな違ったバックグラウンドを持っている中でしっかりとその人を見て尊重している感覚はあった』と悟がとった行動に対しての監督やチームメイトの反応にも考えを述べた。

マイクは自国とは異なるコミュニケーション方法と言動に気付き、現地で受

け入れられる為には、自身の言動を変化させる必要があると気付いた。また、そのような異なる言動はその国の歴史的背景が影響していると考えた。マイクはクウェート、ベトナムと計3年間海外でプレーをして気付いた点があった。『クウェートもベトナムも僕が育ったオーストラリアに比べてオープンでカジュアルな国ではないことはわかっていたけど、会話する相手との関係によって敬語の使い方や敬意を示すジェステマーがあることには驚いた』とマイクは話す。マイクが『チームメイトが誰かに挨拶しているところを見ると、その人との関係性やその人が権力を持っているかもわかる』と話すように、クウェートやベトナムではオーストラリアで交わしていた他者への挨拶や言動に大きな違いがあることに気付いた。そしてマイクは『そのようなふるまいの文化はその国での歴史からきているのではないか』と考えるようになったという。一方で、オーストラリアでのカジュアルな挨拶や上下関係を気にしない言動に対してマイクは『いくら外国人でもクウェートやベトナムでは年齢や地位が上の人に対しては受け入れられないのではないか』と考えた。

マイクは現地で言動を意識的に変化させた。『現地の人々のようになることを目指す必要はないけど、カルチャーバリアを克服する方法は、彼らの文化に溶け込むこと、彼らの生き方や言動、働き方を学んで努力することが文化に適応する近道だと思う』とマイクは話す。マイクはそれ以降、チームの代表や監督と握手を交わす時は、チームメイトが行う握手の仕方と同じ方法で敬意を示すようになった。マイクは『外国人の僕がする必要はなかったのかもしれないけれど、現地では正しいとされる行いをすることによって、相手からも文化に馴染もうと努力している事が伝わるんじゃないかと思ってしていた』と考えがあったことを話した。

### キャリア形成（不安・職業選択）

大輔は将来のキャリアに対する不安はあったものの、海外移籍を経て考え方へ影響を受けた。大輔は海外移籍前から常に不安を抱えながら選手を続けてきたと話す。『不安があるかないかでいうと常に不安です。特にサッカーを終えた後の不安が一番強いですね』と大輔は語っているが、『何しようっていうより、なにがしたいんだろうって言うのが一番大きい』と話すように競技を終えた後

のキャリア形成に不安を持っていた。しかし移籍に伴う渡米後、チームメイトが空いている時間に様々なことに興味を持っている姿を見て、大輔は考えさせられる部分があったという。大輔はチームメイトの行動を見て、『選手をしながらブロックチェーン、NFT（非代替性トーカン）の勉強をしたり大学院で勉強したり、いろんな事をしている人が多い。そういう環境に居たことで、自分も選手をしているうちから興味を持っていることにもっと手を出していった方がいいのかなと感じるようになったんです（NFTの説明を著者が追記）』と話す。

大輔は渡米後、キャリア選択の考え方には大きな影響を受け、サッカーだけではない新たな興味を見つけ、選択肢を広げた。大輔は海外に行くまでは一般会社が保有しているサッカー部に所属していた為、引退後は正社員としてその一般会社に雇用してもらうか、教員免許を保持している事もあり体育の先生になるかの2択しか考えがなかったという。海外移籍の経験を経て、チームメイトのキャリアに関する考え方につれた大輔は、『サッカー以外で興味のある事を見つけてそれを仕事にしてみたいと思っています。今だと日焼け止めの制作に興味があるんです』と、多くのチームメイトがサッカー以外の自分の好きなことを見つける選手をしながら勉強し、仕事にしている姿を近くで見たことで、『こっちの人は引退後にサッカー以外の事で何か楽しんでやってるなっていう憧れはある』と話し、『海外に行かなれば、少なくとも自分で日焼け止めを作つてみたいとはならなかつたと思う』と、大輔は海外移籍を経た事で新たな興味が見つかったと話す。

悟は将来のキャリアに大きな不安を持っていたが、オーストラリアの人々の働き方や考え方には影響を受け、不安が減少した。悟も大輔同様に大きな不安を抱えながら選手生活を過ごしていた。大学卒業後、日本でプロのサッカー選手になれないとい分かった時が悟の1つのターニングポイントだった。『あの当時が一番不安だったのと、その不安を消し去るっていう意味でも英語を身に付けたいとオーストラリアを選んだんです』と悟は海外移籍を決断するが、オーストラリアでチームメイトの働き方、生活スタイルを見て悟の不安が緩和されたと語る。悟は引退し日本に帰国後、収入や生活水準は選手時代よりも下がったと言う。それでも悟は、『オーストラリアの人々は幸せのハードルが低いと感じた』と語るように、収入やどんな仕事に就いているか等、他人と比べることなく身軽な考え方

をオーストラリアでの環境に触れて手に入れる事が出来たと話す。悟は『日本に帰国して今も不安はありますけど、たとえ収入や生活水準が下がっても幸せを感じられる感覚がある。そう感じるのは間違いなくオーストラリアでの5年があったから』と断言する。

悟の帰国後の職業選択は海外移籍での経験が大きく影響している。現在、悟は、サッカーとは全く関係のない公務員を本業としながら、週に1回友人のサッカースクールで指導を行っている。悟が大学を卒業した頃はサラリーマンの道を選んだら終身雇用、サッカーを選んだらサッカーで生計を立てるしかないという考えだった。オーストラリアのチームメイトの働き方、考え方を見た時に悟の中で考えが変わる感覚があったという。悟は、『日本は0か100という考え方で、両方は出来ないでしょという考え方がある。自分もそう育ってきた』と話すように2つの事を同時に行ったり、一度決断したら辞めて違う道を選ぶことは難しいと考えていた。しかし、悟が『サッカーしたければやればいいし、駄目だったら他の事をすればいい。最悪オーストラリアに行って何かしてもいいし』と今はもうどこでも行けるような心の軽さを持っていると悟は話す。『凄く柔軟に考えられるようになった』と悟は語り、このような心にゆとりと持てるようになった背景には悟のオーストラリア時代のチームメイト達の存在があった。悟のチームメイトにはサッカー選手とそれ以外の仕事、所謂ダブルワークで働く選手が多くいた。彼らの他にも家族との時間を大切にする選手、休みをしっかり取って仕事と余暇を上手く分けている選手など、個々のライフスタイルを確立している人々の環境に悟は素敵だと思い憧れを抱いた。日本に帰国した悟がそのオーストラリアのチームメイトと似た生活スタイルは何かと考えた時に浮かんだのが『就業時間、就業日数が決まっており、残業も少ない公務員だった。』と悟は考えたとのことである。『公務員は一番サッカーから遠いように感じるけれど、一番オーストラリアっぽい自分らしく生活が送れると思い決めました』と話す。働いてみてイメージと違えば辞めて違う事をすればいいと、その心の余裕もオーストラリアで影響を受けた思考ではあるが、『今のところストレスなく働いている』と、海外移籍での経験が悟のキャリア形成に大きな影響を与えている。

マイクも大輔や悟同様に自身のキャリアに関して常に不安はあったが、2人とは違い異文化体験を経ても、マイクのキャリアに対する不安は軽減されなか

った。マイクがプロサッカー選手として特に不安を感じる理由は、契約の短さだった。『一生懸命プレーして、契約を勝ち取っても1年や10か月、短い時は6か月の時だってあった』とマイクが話すように、契約を終えてチームと契約更新が出来なかつた後の事を考えると常に『さあでは次は？どこのチームと？どの人と話をしようか？と気持ちが休まる時がなかった』と当時の葛藤を語った。『もちろんみんながそうではなかったけど、僕の場合は6ヶ月～1年で契約更新していかなければならなかつた。そこで判断されるのはいつも何ゴール決めたか、何アシストしたかっていう数字がほとんどだった』と、マイクがプレーしたクウェートやベトナムの外国人選手に対する契約期間の短さ、評価基準が更にマイクのキャリアの不安を増幅させたと話す。

海外移籍による他国でのプレー経験は、マイクの職業選択には大きく影響を与えたもの、人生における優先順位を再認識させ、働き方に影響を与えた。マイクは21歳当時、プロ契約ではなくセミプロ契約だった。周囲には同年代でプロ契約がいる中で、自身が契約出来ていない不安から大学進学を視野に入れていたが、『自分がこれからもずっと関わっていきたいことはサッカーだと気付いた』と語るように、その後もサッカー中心の生活を送ってきた。その後、海外に渡りプロ契約として3年間過ごしたが、マイクが21歳の時に確信した『サッカー中心の生活を送る』考えに変化はなかった。ただ、引退後にどうサッカーに関わっていくかには変化があったと話す。『昔はチームを持ったり、監督になろうと思っていたが、今は自分のサッカーアカデミーを持ちたいと思っている』と考えを述べた。その考え方の裏には、土日に試合がありイレギュラーな予定が多いチームを持つことや、どこの国・チームの指揮を執るか分からない監督業は、『場所や時間の制限がかかる』という事が大きな理由だった。自分で運営するサッカーアカデミーであれば、『どこで、いつ、何を教えるかは全部自分で決められる』という事もマイクの引退後のキャリア形成を後押ししている。マイクは妻と話をする中で、『海外移籍を経験して家族と離れて暮らし、僕自身の生活で何を求めていたかも変わった』と答えるように、マイクはもっと自身の人生をコントロールしたいと考えるようになった。今後引退しても、指導者としてサッカーには関わり続けたいが、海外移籍を経て人生の優先順位を再認識したマイクがどうサッカーと関わるかに変化があった。マイクは海外移籍が大きな分

岐点だったと語る。

## 7. 考察

### 海外移籍とアイデンティティ

海外移籍に伴う異文化体験は、自国と他国のナショナル・アイデンティティを十分理解した上で、適切に自国の言動や価値観を異文化環境で発揮出来る能力の向上に影響するといえる。具体的には、大輔が周囲から認められ、信頼感を感じることができたと話す『さぼらないことや日本人の勤勉さ』を強みとして現地で実践したこと、悟が『時間を守る、ロッカールームのごみを片付けて帰る』といった現地の人々とは異なる価値観に対しての振る舞いを評価されたことは、両者ともに異なる文化を持つ環境でも自国のアイデンティティを保持したといえる。特に興味深い点は、異文化コミュニケーション能力も異文化体験により向上した中で、態度を柔軟に変化させる術を知っているうえで状況に応じて判断し、自国のアイデンティティを貫いて、異なるアイデンティティを持つ人々と適切に生活を送っていたことである。つまり、異文化体験により、どちらのナショナル・アイデンティティを選択しても良い場面で、他国の異文化に適応するだけではなく、自国の文化的背景を忘れずに、日本人としてのアイデンティティを選択する術も身に付けたといえる。ただ、大輔や悟のように自国と他国のナショナル・アイデンティティを理解し、柔軟に選択できる能力を身に付けるために、どれほどの期間を要するかは、さらに研究していく必要がある。

またインタビュー調査結果から、ナショナル・アイデンティティとスポーツには関連性があり、特にプロサッカー選手の地位や扱われ方、外国籍選手に求められているものはプレーする国によって違いが見られた。大輔はアメリカでプレーする選手達は日本人選手よりも結果を求めて、チームよりも個人の活躍を重視する傾向があると語ったように、移民の国であるアメリカの人々はスポーツを通して成功を収めたいというその国のルーツや文化的背景から来ている可能性がある。また、選手に対する周囲の扱い方について、悟はファンや一般人からフレンドリーでカジュアルに扱われた経験から、オーストラリアの frankな文化がこのような扱い方に影響していると考えられる。これはプロサッカー選手が『Jリーガーは一目置かれている』と分かる日本での周囲からの扱いとの比

較から、プロサッカー選手という職業的地位が、日豪間で異なるといえる。一方、マイクがクウェートやベトナムで経験した外国人選手に結果を強く求めるアイデンティティは、自国で各選手達にチームプレーを求めるオーストラリアのスポーツカルチャーとは異なっておりスポーツ内においても文化の違いが見て取れる。インタビュー結果からのナショナル・アイデンティティとスポーツとの関連性は大沼（2003）の先行研究に類似する結果となった。一方で、今回のインタビュー調査から、参加者3名ともに自身の国家的アイデンティティを異なる国で保持する場面が目立ったことに対して、プロサッカー選手としての職業的アイデンティティに関しては、大輔がアメリカでの経験を経て、より結果を意識するようになり、マイクが異国のサッカー文化や価値観を理解しようとしたことからも、職業的アイデンティティは国家的アイデンティティよりも異文化体験の影響を受け、比較的柔軟且つ変化を受けやすいのではないかと推測できる。異文化体験が与える双方のアイデンティティへの影響に関しては、さらに継続的な調査が必要だと考える。

### 海外移籍と異文化コミュニケーション能力

海外移籍に伴う異文化体験は異文化コミュニケーション能力の「知識」、「態度」、「手法」に大きく影響するといえる。インタビュー調査で分かったことに、海外移籍の経験から、自文化と他文化、双方の価値観や考え方を評価し、その言動の背景や考え方を理解し異文化環境下で適切な振る舞いをしようとする能力が向上した。大輔はアメリカでの海外移籍から帰国後、改めて日本の人々は『すげ一年齢や経歴を気にしながら』相手との関わり方を変化させると日米の文化の差を見つけた。悟はオーストラリアのチーム内で『上下関係はほぼないに等しかった』と監督、チームメイトに対して年齢や肩書きではコミュニケーションの仕方をえていないと語る。大輔は『移民の人々が多いから、育ちとか環境で助け合う事が多かったのかな』と話し、悟はその背景に『オーストラリアは多民族な国だからこそ、年齢や地位で人を判断したり、言動を変えたりしないのではないか』と考えた。マイクはクウェートやベトナムで経験したハイアラキーや肩書きによる言動の変化は『その国の歴史的背景から来ているのではないか』と考えを述べた。興味深い点は、3名とも自文化と他文化の価値観や考え方を理解し

たうえで、それぞれの環境下で適切にコミュニケーションの形を変化させていたことだ。例えば、マイクは自国のオーストラリアでは監督や年上のチームメイトに対しても、『相互にオープンでカジュアルな会話を好む』と理解しているうえで、クウェートやベトナムでプレーした際は、チームメイトや人々の歴史や文化を受け入れて、現地の挨拶や振る舞いをマイクも実践した。『彼らの文化に溶け込むこと、現地で正しいと思われる行いをすること』がカルチャーバリアを克服する近道だと考え、異文化の環境下に適切な振る舞いを見つけた。つまり、異文化コミュニケーション能力の「知識」や「態度」が向上するだけでなく、「手法」も海外移籍による異文化体験で身に付いた可能性があると言える。Byram (2020) の提唱する異文化コミュニケーション能力の3つの構成要素が向上した理由としては、サッカーという集団スポーツでのチーム内活動時間が長いことにより、異文化を観察する時間が通常よりも濃く、幅広い異文化に触れる事が出来たことが要因だと考える。そして、異文化体験が異文化コミュニケーション能力の向上に関係することは、Ra et al. (2022)、Tajeddin et al. (2020)、Shiri. (2015) の先行研究とも一致する。

## 海外移籍とキャリア形成

海外移籍に伴う異文化体験はキャリア形成に大きな影響を与えるとインタビュー結果から考えられる。特に「現役中の引退後に向けたキャリア形成への行動」、「キャリア形成への意識の変化」、そして「将来の仕事との関わり方」は、異文化でプレーする中で、異文化環境や人々との出会い、考え方につれて大きく影響を受けていることが分かった。インタビュー結果により、3名とも『現役中から引退後のキャリアは常に不安だった』を語る。大輔は『なにをしようではなく、何がしたいかわからない』と話し、悟は『当時一番不安だった時に、その不安を消し去る為に英語の勉強を』と、海外移籍を決めた。前述の通り、現役中からのキャリア形成の不安は、現役中に引退後の明確なキャリア計画が出来ていない事が要因の一つだと分かる。海外移籍により大輔はチームメイトが空いている時間に積極的に興味のあることや将来のキャリアについて考え勉強している姿に影響を受け、悟はチームメイトがサッカー選手という仕事だけでなく、違う職業も同時に行うダブルワークという働き方を間近で見てキャリアの考え方

が大きく変わった。この調査結果から、解雇通告を受けて、自ら次のキャリアに移行する「半受動型」が一番多いパターンであった（上代・野川、2013）と先行研究にはあるが、異文化体験をすることにより、より能動的にキャリアトランジションをする傾向にあることが本研究の分析から言える。

職業選択においても異文化体験が大きく影響していることも非常に興味深い。大輔はチームメイトや引退した選手がサッカー以外の事で何か楽しんでやっている姿を見て憧れを抱き、大輔自身も興味がある事について勉強をするようになった。悟は現在引退して公務員として働きながら、サッカーの指導者というダブルワークで生計を立てているが、その働き方は異文化体験により獲得したキャリアの考え方である。マイクは引退後もサッカーに関わっていくことに変化はなかったが、長い海外生活で家族と離れて暮らす日々が続き、マイクの価値観や考え方にも変化があった。マイクがどのようにサッカーと関わっていくかは「家族等の重要な他者への影響」が大きく関係している。悟はオーストラリアで職業や収入に関して、周囲の人々が『他人と比べることなく身軽な考え方』を持っていて影響を受け、悟自身も引退後は「社会からの反応」を気にすることが減り、悟自身の『幸せのハードル』を下げた。3名によるインタビューの分析結果から、Drahota & Eitzen (1998) の Role Exit Model が示す4つの段階である、「自己不安」、「代替キャリアの模索」、「転換期」、「新たな役割の創造」は3名のインタビュー対象者の重要なキャリアトランジションの段階と一致している。さらに、海外移籍に伴う異文化体験はこれら4つの段階全てでキャリア形成に肯定的な影響を与えるといえる。

## 8. 結論

本稿ではプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がアイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成に大きく影響することがわかった。具体的には、異文化体験は職業的アイデンティティに大きく影響することが明らかになった。またキャリア形成において異文化体験以前に保持していたキャリア観を変えることがわかった。それによりサッカー選手のキャリア形成の過程で起こる「自己不安」や「代替キャリアの模索」に影響を与えた。海外移籍による異文化体験が、自他国のアイデンティティの理解を深め、異文化コミュニ

ケーション能力3つの構成要素に肯定的な影響を与えた理由としては、サッカーという集団スポーツでのチーム内活動時間が長いことにより、異文化に触れる時間が通常よりも濃く、幅広い異文化に触れる事が出来たことが要因だと考へる。また、海外移籍はキャリア形成にも大いに影響を与えると考えられる。海外でプレーしながら異文化環境や人々との出会い、異なる考え方触れることで、キャリアに大きく影響を与えていたことがわかった。

今後は、本研究では明らかにならなかったキャリア形成において「自己不安」が解消されないケースの要因、国家的アイデンティティが異文化体験でも変化が少ないと想定される要因について研究が進められる必要がある。

## 謝辞

本論文は2023年度しあわせ研究費（研究テーマ：異文化体験が及ぼすキャリアアビリーフ（職業的信念）への影響）の助成を受けたものです。本研究のインタビュー調査に協力して下さった3名の方々にお礼申し上げます。

## 参考文献

- 阿部拓真, 木村和彦, 醍醐笑部, & 作野誠一. (2021). アスリート・キャリアに関する国内研究の動向と課題: スコーピング・レビューを通じて. 体育・スポーツ経営学研究, 34, 1-23.
- 大沼義彦. (2003). アイルランドにおけるスポーツの背景: エスニシティとナショナル・アイデンティティとの間. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 89, 89-103.
- 上代圭子, & 野川春夫. (2013). 日本人元プロサッカー選手のキャリアプロセスに関する研究 自主的な引退と非自主的な引退に着目して. 生涯スポーツ学研究, 9(1-2), 19-31.
- 萩原悟一, & 磯貝浩久. (2014). スポーツにおける個人・社会志向性と競技者アイデンティティーの関連を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルの検討. スポーツ産業学研究, 24(1), 1\_7-1\_15.
- 溝上慎一. (2013). 自己形成の心理学：他者の森をかけ抜けて自己になる. 世界

思想社.

- Byram, M. (2020). Teaching and assessing intercultural communicative competence: Revisited. *Multilingual Matters*. *The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 27, 70-84.
- CIES Football Observatory. (2023). Global study of football expatriates (2017-2023) <https://football-observatory.com/MonthlyReport85> (最終閲覧 2024年2月14日)
- Drahota J. A. T. & Eitzen, D. S. (1998) The role exit of professional athletes. *Sociology of Sports Journal*, 15, 263-278.
- Kronholz, Julia F. & Osborn, Debra S. (2016). The Impact of Study Abroad Experiences on Vocational Identity among College Students. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18, 70-84.
- Ra, J. J., Boonsuk, Y., & Sangiamchit, C. (2022). Intercultural citizenship development: a case of Thai study abroad students in EMI programs. *Journal of English as a Lingua Franca*, 11(1), 89-104.
- Ritchie, J. and Spencer, L. (1994). Qualitative data analysis for applied policy research. In A. Bryman and R. G. Burgess (Eds.), *Analyzing qualitative data*, 173-194. London: Routledge.
- Shiri, S. (2015). Intercultural communicative competence development during and after language study abroad: Insights from Arabic. *Foreign Language Annals*, 48(4), 541-569.
- Tajeddin, Z., Khanlarzadeh, N., & Ghanbar, H. (2022). Learner variables in the development of intercultural competence: A synthesis of home and study abroad research. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 12(2), 261-301.

## 付属資料

### インタビュー質問項目

同僚（チームメイト）、指導者、ファン、地域の人々とのコミュニケーションの仕方において

- ① 自文化、他文化についてどのような発見をしたり、自身のこれまでの考え方には変化はありましたか。
- ② 現地の人々の言動のような見える文化はどのような考え方や価値観から生まれているか考える機会はありましたか。
- ③ 同様に日本での人々の言動の仕方についてのその裏側にある考え方や価値観を考えることはありましたか。
- ④ 異文化体験を経て、文化の違いに迷う事はありましたか。（どちらの文化を選んでもいいような場面で）迷った時にどのような選択をしてきましたか。
- ⑤ サッカー選手として、自文化と多文化で共通している文化、または違う文化はありましたか。
- ⑥ 現役中に将来のキャリアについて不安を感じることはありましたか。（あつた場合）どんな時に、どのような不安を感じる事がありましたか。異文化体験後に何か自己不安に変化はありましたか。
- ⑦ サッカー以外のキャリアを考える事はありましたか。異文化体験後、それまで持っていた考えに変化はありましたか。
- ⑧ （引退した選手への質問）能動的か受動的な引退どちらでしたか。引退を決断した時に異文化体験は影響しましたか。
- ⑨ （現役の選手への質問）プロを終えたら何をしたいか考えていますか。（あつた場合）なぜそれをしたいですか。その考えに異文化体験が影響していますか。
- ⑩ （引退した選手への質問）プロを引退して今は何をされていますか。今されている仕事に何か異文化体験が影響していますか。